

多様性のなかの差別とバリア

今回は、言語権や情報保障の視点から、ことばや情報のバリアをいかになくしていくか、だれもが情報をやりとりすることができるようにするためには、なにが必要なのかを、多角的に検討する。

この社会には、いろいろな人たちがいる。人間が多様であることは、もはや常識のようにになっている。問題は、多様性に対する認識や態度であり、その多様性の内実である。

長瀬修（ながせ・おさむ）は、社会が「多様な人間像を前提とせず、非常に狭く定義されたノーマルなものからはみ出している者に肩身の狭い思い、自分が悪いのだという思い、みんなの重荷になっているという思いを持たせてきた歴史がある」と指摘し、つぎのようにのべている（ながせ2002:144）。

しかしそもそも介助が必要な人に介助がないのがおかしい。目が見えない人に点字や音声での情報がないのがおかしい。むずかしい字が読めない人に漢字ばかりの文書しかないのがおかしい。公共機関の連絡先に電話番号しかないのがおかしい。会議に手話通訳者の準備がないのがおかしい。段差ばかりの建物がおかしい。〈おかしいのは自分ではない。こうした自分を受けとめていない社会こそがおいしいのだ〉という視点への転換が起こったのである（145ページ）。

では、本来であれば、どうあるべきなのだろうか。たとえば、長瀬のいう「公共機関の連絡先に電話番号しかない」状態を改善するために、なにが必要だろうか。どんな選択肢があるだろうか。会議に手話通訳者だけいけば、みんなが参加できるだろうか。さまざまなことを具体的に考える必要がある。

逆にいえば、これまでの社会は「多様な人間像を前提」としてこなかったのである。社会には、多様な人がいるということを前提にして、社会のかたちをつくるという方針がとられていけば、少数派が社会生活をおくるうえで障害に直面することもないだろうということだ。そして、「多様な人間像を前提」とした社会は、公平で生活しやすいはずだということである。現在、「多様な人間像を前提」にして社会を設計するようにしようという理念と実践がある。それをユニバーサルデザインという。

ユニバーサルデザインとは

川内美彦（かわうち・よしひこ）が指摘するとおり、ユニバーサルデザインを提唱したのはアメリカの「建築家であり製品デザイナー」のロン・メイスである（かわうち2006:97）。ユニバーサルデザインは「問題を社会的なアプローチで解決しようと考えており、いわゆる『社会モデル』をベースにした考え方である」（98ページ）。川内は、ロン・メイスが提唱した「可能な限り最大限に使いやすい製品や環境のデザイン」（98ページ）という視点をつぎのように説明している。

UD [ユニバーサルデザインのこゝ引用者注] はこれまで省みられることのなかったニーズをも取り込んで、よりよいものづくりを行なっていくとする考え方だが、一方で、すべての人に使いやすいなんて理想論であって現実にはありえないという批判もある。人のニーズは非常に多様だからこの批判は正しいといえるが、UDは「すべての人に使いやすい」が不可能なことであることをよく承知しているので、それゆえ定義の中に「可能な限り最大限に」と述べているのである。

「すべての人に」はゴールとして掲げるとしても、そこには行き着けないことはわかっている。しかし行き着けないとしてもできるだけそのゴールを目指していくことは重要なことであり、その姿勢を「可能な限り最大限に」と言っているのである（101ページ）。

当然のことながら、人間やニーズの多様性に「一つのやりかたで解決する」のは不可能である（107ページ）。そのためユニバーサルデザインは、「よりよいデザイン」の「よりたくさんのデザイン」をめざす必要がある。

いまここにある障壁をとりのぞくーバリアフリー

ユニバーサルデザインという理念は、この社会で生活している多様な人たちの存在をあらかじめ認知し、それを前提として社会をつくっていかうというものである。「みんな」や「多様性」を意識した視点だということだ。

だれもが利用しやすいようにと提唱することは簡単である。しかし、そもそも、その「だれもが」というのは、だれのことなのか。――「みんなって、だれのこと？」。

人間の多様性をくわしく把握しつづける作業をしないかぎり、ユニバーサルデザインは、たんなる抽象論になってしまう。そのため、「いまここにある障壁をとりのぞく」というバリアフリーの視点は、視点が具体的であるという点で重要な意味をもつ。ユニバーサルデザインやバリアフリーをかんがえるときには、「だれでも参加できるじゃんけんとは」「文字がよめなくても利用できる交通機関にするためには」など、具体的に問いを設定する必要がある（あべ2012）。

情報のかたち／言語のかたちを体系的に整理する

「障害者とのコミュニケーション」をかたるとき、安易に点字と手話をセットにして論じることがある。その問題について、亀井伸孝（かめい・のぶたか）がくわしく説明している。

まず、人類の自然言語全体を、音声言語と手話言語のふたつに大別することができます。音声言語は、文字をもつ言語と文字をもたない言語に分かれます。一方の手話言語は、文字をもたない言語の数かずです。そして、文字をもつ言語に対しては、墨字と点字というふたつの文字の体系が考案されています。

ここで、「手話と点字をまとめてあつかう」とことは、人類の自然言語の一部である手話という諸言語と、音声言語の中の文字をもつ言語の、さらに一部の文字体系である点字を、無造作にひっくるめて同じ仲間と見なしていることです。この分類には論理的な根拠がなく、「英語と漢字」のようにまるで異質なものを並べているのと同じです（かめい2010:155-156）。

…「手話と点字」というふうに、マイノリティの文化だけを中身によらずまとめてあつかうと、それだけが特殊なものとして対象化されます。そして、それぞれと対をなすはずの「音声言語」「墨字」という自分たちの文化を呼ぶことばがかき消されてしまいます（157ページ）。

つまり、「手話と点字」をならべて論じるとは、論理的でないだけでなく、多数派による少数派文化の有徴化であり、自分たちの文化を普遍化（無徴化）する行為であるといえる（有徴と無徴については第4回で説明する）。多数派のコミュニケーション手段を相対化するために、音声言語や墨字（すみじ）という表現をおさえておきたい。墨字と点字はどちらも音声言語の文字表記である。

ここで、言語のかたちを整理してみよう。

言語は、五感のうち聴覚、視覚、触覚によってやりとりすることができる（受信と発信）。

聴覚による言語：音声言語。日本語、朝鮮語、スワヒリ語など多数。

視覚による言語：手話言語。日本手話、アメリカ手話、イギリス手話など多数。

音声言語には、はなしことば（発話）、かきことば（書字）がある。

はなしことばには、声と指字の2種類がある。

かきことばの書記方法には、墨字（視覚）と点字（触覚）の2種類がある。

手話言語には、かきことばがない（文字化の研究はされている）。

はなしことばには、手話と触手話の2種類がある。

指字や触手話とはなにか。視覚と聴覚に障害がある場合、音声や手話をきいたり、みたりすることができない（むずかしい）。指字は、点字タイプライターの要領で、盲ろう者の両手指に、指字がわかる人が両手指で発信することである。触手話は、対面した状態で手話による発信を盲ろう者が手で触れながら受信することである。

現在、メディアはマルチメディア化されている。テレビは、音の情報と視覚情報を同時にながしている。

テレビ放送をバリアフリー化するために、字幕放送や副音声による解説をしている。その字幕や音声解説は、言語情報だけでなく、音や視覚情報についても、文字化したり、解説したりしている。

このように、メディアのかたちを複数容易することが必要である。こうした、メディアのかたちを複数化したものを「マルチモーダル」という。マルチモーダル図書といえば、墨字版だけでなく、点字版、音声（音訳）版、テキスト版を用意した本のことである。手話に字幕をつけた映像版が作成されることもある。

ウェブアクセシビリティとは

ウェブページは、ウェブブラウザによって表示させるものである。ウェブブラウザには、たくさんの種類がある。ウィンドウズのパソコンにはインターネットエクスプローラー（IE）が標準で装備されており、アップルのマックにはサファリが装備されている。ほかにも無料でダウンロードできるウェブブラウザがたくさんある。グーグルクローム（Google Chrome）、ファイアフォックス（Firefox）、オペラ（Opera）などである。

どのウェブブラウザをつかうかによって、ウェブページの見えかたは、すこしちがう。標準の設定を自分なりにアレンジすることで、ウェブページの見えかたは、さらに変化する。

文字をおおきめに表示したり、画像は表示させないなど、つかいやすいようにアレンジしてウェブページを見ているとき、サイトによっては、文字と文字が重なって表示されたり、ほとんど情報がぬけおちてしまう場合がある。それは、ウェブページのHTMLの記述に問題があるからだ。HTMLとは、ウェブページの文章を記述する言語のことである。文字が重ならないようにするためには、行間（line-height）を指定すればいい。

画像（img src）には代替テキスト（alt=""）をつける必要がある。

テキストブラウザや音声ブラウザ（よみあげソフト）をつかっているならば、画像は表示されないし、よみあげられない。だが、画像に代替テキストをつけていれば、それが表示され、よみあげられる。ウェブページは、見ためをよくするために画像をたくさんつかっている場合がある。その場合、画像に代替テキストをつけていなければ、必要な情報にアクセスできないということがおきてしまう。

現在、たくさんの人がウェブで発信をしている。ブログやウェブサイトを運営している人はすくなくない。ウェブアクセシビリティについての基本的な理解が必要である。

ウェブ上にはウェブアクセシビリティについて解説するサイトがたくさんある。HTMLの記述を自動で判定するサイトもある（「Another HTML-lint gateway」 <http://openlab.ring.gr.jp/k16/htmlint/htmlint.html>（日本語サイト））。

多言語化に「やさしい日本語」を追加する

近年、多言語による情報提供に熱心な地方自治体は、さまざまな言語で情報発信するだけでなく、「やさしい日本語」でも情報発信している。

やさしい日本語とは、災害時における緊急措置として提唱されたものである。つまり、災害が発生した直後から多言語で情報を提供することはできないから、多言語で情報を提供できるようになるまで、やさしい日本語をつかった音声で情報を提供しようということだ。弘前大学の社会言語学研究室が中心になって研究／実践をすすめてきた。ほかにも、日本語学を専門とする庵功雄（いおり・いさお）らによる「やさしい日本語」研究グループがあり、こちらは災害時に特化しない方向で研究、議論をすすめている（<http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi/>）。

わかりやすい表現を必要としているのは日本語学習者だけではない。むずかしい漢字表現や外来語が苦手な人もいる。やさしい日本語を、たくさんの人が必要としている。

2011年の東日本大震災をうけ、『識字の社会言語学』で「やさしい日本語」を紹介した部分をウェブに公開した。くわしくは、そちらをみてほしい（<https://hituzinosanpo.hatenablog.com/entry/20110312/1299860811>）。

また、『もう一つの日本語で語る多文化共生社会—コミュニケーションツールとしての「やさしい日本語」』というブックレット（みやばら編2011）や論文集の『「やさしい日本語」は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために』（い

おりほか編2013)、『やさしい日本語』と多文化共生』(いおりほか編2019)も参考になる。『やさしい日本語』という岩波新書もでている(いおり2016)。

愛知県と「多文化共生リソースセンター東海」が作成したアプリ「やさしい日本語」は、どのような表現がむずかしいのか、それをどのように言いかえれば、わかりやすくなるのか、たくさんの文例に解説をつけて説明している(<http://www.pref.aichi.jp/0000059054.html>)。

もうひとつの「通訳」—言語障害のある人の発話をききとる

身体障害者のなかには言語障害がある人がいる。ここでの言語障害とは、発音が明瞭でなく、通じにくいということだ。言語障害が比較的軽度であれば、初対面でも通じる。しかし重度の言語障害があれば、なかなか通じない。そこで、介助者が通訳の役目になうことがある。もちろん、会話する本人同士が直接はなすのが一番よいだろう。しかし、それをすべての場面でしていたら、ほかのことができなくなってしまう。状況に応じて、自分で会話したり、介助者に通訳をさせる。言語障害があり、介助を利用している人は、その都度それをえらんでいる。

わたしも介助者として、電話や窓口、病院などで言語障害のある身体障害者の発言を通訳することがある。

ききとるコツは、その人の発音の特徴をつかむこと、早とちりをしないこと、何度も確認することなどだ。わかったふりをして、おたがいのためにならない。

要約筆記(文字通訳)

きこえない人、きこえにくい人のすべてが手話を使用しているわけではない。中途失聴者や難聴者は日本語を日常のコミュニケーションで使用している。ただ、きこえない、きこえにくいと、筆談をするか、要約筆記をつける必要がある。要約筆記は、大学のような学習する場では「ノートテイク」ということもある。最近では、「文字通訳」という用語が定着しつつある。言語のちがいでなく、身体がちがいを視野にいれると通訳や言語権の範囲はひろくなる。最近では、包括的な用語として「情報保障」と表現することもある(あべ2015)。

また、テレビや動画であれば字幕が必要である。

ことばで人を排除しないために

なぜ、わかりやすいことばで表現することが重要なのか。なぜ、情報にアクセスする権利を保障することが要求されるのか。井上逸兵(いのうえ・いっぺい)は、カタカナ語の問題を指摘する文脈で、その点を明確に説明している。

カタカナ語が問題なのは高齢者が理解できないからだけではない。高齢者がそのコミュニケーション活動から排除されているということなのである。それが特に自分にも直接関わるような行政、お役所のことばに多く用いられると、困惑はさらに大きなものになることは十分に想像できる。カタカナ語を多用することで、「これはあなたたちには関係のないこと」という副次的なメッセージが生成されてしまうのである(いのうえ2005:63)。

つまり、「わかりやすい表現は、だれもが社会の一員として尊重される存在であるということを実質的にしめすためにも必要なのである」(あべ2010:303)。ことばのバリアフリーは、アクセス権、社会参加の点で重要なだけでなく、自己尊重感(セルフエスティーム)のためにも重要であるといえる。

おまけ：新型コロナウイルスの予防と障害者介助の日々

4月ごろに四條河原町の南で犬の散歩をしている人に声をかけられました。「〇〇ってどこですか」というのが、よく聞かえず、「え、地下鉄ですか?」と聞きかえしました。相手は「北!」と。おたがいマスクをしているので、声が聞き取りにくい。ちなみに、道案内をするにも、されるにも「方角をいう」のが京都文化です。

わたしは身体障害、知的障害の人の訪問介助をしていて、なかには言語障害があって発声が明瞭でない人もいます。普段から、何度も確認しながら、「〇〇ですか?」「た・ま・に」のように、一単語ずつ、あるいは一音ずつ確認しながらコミュニケーションをしています。最近は、外出中はおたがいマスクをしているため、いつも以上に聞きとりが困難になっています。なので、どうしても聞きとりできない場合は、わたしが「あ・か・さ・た・な…」とって、うなづいてもらう、で、「た・ち・つ・て」でうなづくので、「て」ですね、というふうに確認することが増えました。10年間その人の介助しているのに、マスクをただけで、これだけ音声コミュニケーションが困難になるとは想像していませんでした。立体マスクなら、まだマシになるかもしれませんが。厚労省の布マスクは、平面で小さいので…。

しかし、ともかく、それでコミュニケーションはできるのです。相手が「あ・か・さ・た・な」とやってくれたら、意思伝達はできるわけです。さらに想像してみてください。日常のコミュニケーションに障害のある障害者が、新型コロナウイルスに感染し、重症化した場合、どうなるでしょうか。どうすればいいでしょうか。いろいろと、考えるべき課題があります。

なお、3月2日に「新型コロナウイルスとことばのバリアフリー（医护人员如何追求语言无障碍）。」というブログ記事を書いたので、あわせてご覧ください (<https://hituzinosanpo.hatenablog.com/entry/2020/03/02/013848>)。中国のとりくみを紹介しています。

参考文献

- あべ やすし 2010 「識字のユニバーサルデザイン」かどや ひでのり／あべ やすし編『識字の社会言語学』生活書院、284-342
- あべ やすし 2012 「情報保障に必要なこと」 <http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/zyoohoo.html>
- あべ やすし 2013 「情報保障と「やさしい日本語」」いおり ほか編『「やさしい日本語」は何を目指すか』ココ出版、279-298
- あべ やすし 2014 「情報のユニバーサルデザイン」佐々木倫子（ささき・みちこ）編『マイノリティの社会参加—障害者と多様なリテラシー』くろしお出版、156-179
- あべ やすし 2015a 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院
- あべ やすし 2015b 「漢字のバリアフリーにむけて」『ことばと文字』4号、97-105
- あべ・やすし 2018 「調査報告 情報保障に関する韓国の法制度概観」『社会言語学』18号、97-112
https://docs.wixstatic.com/ugd/afcbdb_c3ad880c5b644e548bc154a75791f5cf.pdf
- あべ・やすし 2019a 「ことばのバリアフリーと〈やさしい日本語〉」公開シンポジウム「〈やさしい日本語〉とその関連領域」一橋大学 2月8日 <http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/abe2019a.html>
- あべ・やすし 2019b 「ことばのバリアフリーからみたピクトグラムと〈やさしい日本語〉」庵功雄（いおり・いさお）ほか編『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版、193-209
- 庵功雄 2016 『やさしい日本語』岩波新書
- 庵功雄ほか編 2013 『「やさしい日本語」は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- 庵功雄ほか編 2019 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版
- 井上逸兵（いのうえ・いっぺい） 2005 『ことばの生態系—コミュニケーションは何でできているか』慶應義塾大学教養研究センター
- 井上滋樹（いのうえ・しげき） 2004 『ユニバーサルサービス』岩波書店
- 亀井伸孝（かめい・のぶたか） 2010 「少数言語としての手話、少数文字としての点字」広瀬浩二郎（ひろせ・こうじろう）編『万人のための点字力入門—さわる文字から、さわる文化へ』生活書院、151-162
- 川内美彦（かわうち・よしひこ） 2006 「ユニバーサルデザインについて」村田純一（むらた・じゅんいち）編『共生のための技術哲学—「ユニバーサルデザイン」という思想』未来社、96-109
- 田中邦夫（たなか・くにお） 2004 「情報保障」『社会政策研究』4号、93-118
- 長瀬修（ながせ・おさむ） 2002 「障害学」市野川容孝（いちのかわ・やすたか）編『生命倫理とは何か』岩波書店、144-150
- 成松一郎（なりまつ・いちろう） 2009 『五感の力でバリアをこえる—わかりやすさ・ここちよさの追求』大日本図書
- 藤田康文（ふじた・やすふみ） 2008 『もっと伝えたい—コミュニケーションの種をまく』大日本図書
- 嶺重慎（みねしげ・しん）／広瀬浩二郎（ひろせ・こうじろう）編 2014 『知のバリアフリー—「障害」で学びを拡げる』京都大学学術出版会

宮原暁（みやばら・ぎょう）編 2011 『もう一つの日本語で語る多文化共生社会—コミュニケーションツールとしての「やさしい日本語」』 大阪大学グローバルコラボレーションセンター

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/issue/booklet.html>

村越愛策（むらこし・あいさく） 2014 『絵で表す言葉の世界—ピクトグラムは語る』 交通新聞社

山岸順一（やまぎし・じゅんいち）ほか 2015 『おしゃべりなコンピュータ 音声合成技術の現在と未来』 丸善

ユニバーサルデザイン研究会編 2017 『増補版 人間工学とユニバーサルデザイン新潮流』 日本工業出版

コメントの紹介

※自分のコメントが紹介されなくても気にしないでください。あまりにもたくさんのコメント、しかも長文をのせましたが、せつかなので、まあ、学生の文章なので、みなさんにとっても興味があるでしょう。読める範囲で読んでください。「…」は省略を意味します。

なお、第1回は新入生の希望者／都合のつく学生だけを対象にzoomをしました。出身地、給食にクジラがでたか？クジラがでたという回答におどろいたか、困っていることはなにか、なんとかやれそうか、などについて確認しました。ご参加ありがとうございました。今後、zoomは実施しません。ただ、毎回20分くらいは、配布資料を解説（補足）するためのYouTubeライブをします。

私はカナダに一年間住んだことがあるが、カナダをソトから見ていたイメージとカナダをウチから見るとでは全く異なっていた。カナダに行くまでは、カナダには白人ばかりが住んでいるという先入観があった。しかし、それは私の勝手な思いこみにすぎないということがウチに入り初めてわかった。カナダには多くの移民がいて、地域によっては白人のほうが少ないほどだった。カナダは、様々な人が集まる「多民族国家」であった。そして多民族が混在することにより、「カナダ文化」は私にとって曖昧で捉えにくいものとなった。例えば、食事は家庭によって様々で、「カナダの家庭料理」を断定することさえ難しいと感じた。カナダは一つの独特の文化があるというよりは、「多国籍」というのが文化といっても過言ではないように思う。そして、それを差別したり特別視したりすることもなく、自然に当たり前で尊重し合っているのがカナダの文化であると私は考える。私にとって、カナダでの生活は多文化を知ることのできた初めての経験であった。日本のウチにいたら気づくことのできなかつたことを、日本のソトにでてカナダのウチに入ることで知ることができたのである。…ライブ授業では、パソコンや回線の調子が悪く参加できなかった時に、欠席扱いになってしまうのではないかと不安です。この点では、オンデマンド型の授業の方が安心できます。

【あべのコメント：文化は国籍を単位に存在しているわけではないです。たとえばカナダには先住民もいる。つまり、そういう状況を表現することばがまさに「多文化」なんです。カナダには、カナダなりの多文化状況があり、日本には日本なりの多文化状況があります。】

私は文化のステレオタイプについて考えてみました。高校で文化相対主義を習った時、それが理想だけれど不可能ではないかと感じました。私はハリウッド映画をよく見ます。最近の映画はあまりないですが少し昔の洋画でのアジアの描写は、欧米の地域の描写と比べるとどこかエキゾチックな印象で描かれたり発展していない印象を受けるものがあるなあと感じていました。製作者の意図はわかりませんが勝手なイメージや先入観も少なからず存在するからこそだと思いました。…

【あべのコメント：社会というのは、これで完璧というものはなく、よりよくしていくものです。不可能かどうかは関係がない。改善すべきものは、改善するように目指すだけです。たとえばハリウッドのアジア（人）の描写（表象）についても、アジア系アメリカ人による「Asian Misrepresentation in Media」という議論があり、是正しようとする社会運動があります。】

…私は地球上に存在する多種多様な文化に興味があるが、そのひとつひとつを本やインターネット、その文化の中で育った人の話を聞くだけでは不十分であるのだと再認識した。百聞は一見に如かずというように、実際にその地に赴いてみなければわからないことがあるのだ。文化人類学で最も大切なことはフィールドワークであると聞かすが、それにはこのようなゆえんがあるからなのだと納得した。…

私の家では、目玉焼きを食べるときに醤油をかけて食べる。お弁当に入っている卵焼きは甘い味だ。それが当然だと思っていたが、友人は目玉焼きにウスターソースをかけた。買って来たお弁当に入っていた卵焼きは塩っぱい味がした。あり得ないと思った。けれど、資料を読んでそれも文化だということに気づいた。家庭の中にも文化というものがあるのであれば、自分はその内側にいて外側にいる人のことを真っ向から否定し、理解しようともしていないことに気づいた。これまで文化というと日本の文化やアメリカの文化など、大きな枠組みでしか捉えてなかった。けれど、身近なところにも文化はあるという視点を持ち、それらを理解しようと心がけながら学びを深めたい。

【あべのコメント：その「あり得ない」が大事なポイントですね。そんなふうになってしまうんですよ。自分の「当たり前」がくつがえされたら。でも、そのときに「文化がちがうだけなんだ」と気づくことが大事です。】

…遠隔授業の意見と、環境を簡単にまとめておきます。2日間授業を受けましたが、一言でまとめれば、リアクションを拾う手立てを用意していない授業は非常に受講しにくい。この講義のYouTube Liveはとても聞きやすかったのですが、それはいつでもこちらのリアクション（コメント）が見られているからで、他の講義ではTeamsやZoomを使っている、学生はミュートとカメラオフの状態かつコメントを見ていないということがあります。オンデマンド型でも、PPTだけ閲覧できる授業（オンデマンドと言えるか微妙ですが）より教員が映っているビデオの方が、その場で質問はできないですが顔が見られるからか受講しやすいです。今のところ受けやすいと思っている講義は、この講義の他に

・オンデマンド型の、GoogleDrive上に動画とレジュメがある講義

・Live型の、Teamsの会議機能でビデオ通話（強制ミュートに教員がせず、途中で発言できる）と教科書を用いる講義で、受けにくい講義は、

・PPTのみ配布され、課題提出をする講義

・Live型の、Teamsの会議機能を使うが強制ミュートされ途中で発言ができない講義です。…

【あべのコメント：とても分析的なコメントで参考になります。すばらしい。】

文化論について語るとき、「実態をきちんとふまえ、公平な視点にたつて比較する必要がある。」(授業資料より)とありました。人は自分の視点を普遍化しやすく、公平な視点で比較するというのはとても難しいことだと思うので、この方法が本当に可能なのか疑問に感じました。新型コロナウイルス流行により大学での授業が遠隔になったことで困ったことは、画面によるコミュニケーションが取りにくいことです。よかったことは通学時間に往復5時間かかっていたため、とても楽に授業が受けれるようになり時間に余裕が持てたことです。

【あべのコメント：すごく大事なポイントです。人は神ではないので、あらゆることを把握したうえでなにかをすることはできない。たとえば裁判。かぎられた情報にもとづいて「人が人を裁く」。なんにせよ、一度ふりかえってみると、危ういことをしてしまっている。でも、できるかぎり、きちんと状況を把握することを目指すことはできるし、完全に把握しきることは困難であるからこそ、「一生もの」の課題として研究しつづけることもできる。とはいえ、「公平な視点」にたつことは、じっさい問題、困難なことです。たとえば学生が通学に往復5時間かけている場合もあることを知らずに、教員は学生の態度を見ている。】

私は外国人です。私は小学生の時、国の風習で小さなお守りを首につけていたのですが、ある上級生が私が学校にネックレスを付けていると先生に言いつけたことがありました。彼女の文化とは違っていただけです。私は日本にいる限り自分はマイノリティな存在で批判されるのは必然的なことだと思っています。「郷に入れば郷に従え」という言葉の通りあえて自文化を出さずより隠していた方が生きやすいと感じてしまいます。…

問題は文化として、私は「家事は女性がするもの」という文化に問題があると思う。ドラマなどで女性が家事をしていたりすることもあるし、実際に自分の家庭がそうだったということも、そういう考え方の原因になっていると思った。みんながみんなそういう考えを持っているわけではないけれど、この前テレビで「料理しない女は女と思ってない」と発言している人を見てすごく腹が立った。本気で言っているのかバラエティー受けとしていっているのかはわからないけれど、多かれ少なかれそういう考えを持っているんだろうし、女性を何だと思っているんだと思った。…

私は大学に入る前は、大学は人生の夏休みと言われるくらいなのでたくさん遊べると勘違いをしていました。しかし、実際にはそんなことはなく、大量の課題に膨大な量のテスト範囲が待ち受けて、長期休み以外はとても忙しかったです。あまりにも入学前の自分のイメージとかけ離れているので、最初は戸惑いもありました。…

研究者は、先人の研究内容を知り、まだ議論が行き届いていない部分を見つけ、そこを掘り下げ、形にすることで自分の研究を「独自性」のあるものにしてきた。今朝Twitterで『自分の専門分野について、社会的な位置付けを語っただけで、「どうして自分のことばかり言うのだ!」とか「上から目線!」「選民思想」と言うのなら、日本中の科学研究費の申請書は、すべて上から目線の選民思想ということになってしまう。』(原文ママ)と、演劇家の平田オリザ氏がツイートし炎上していた。『演劇は他の分野と比べて社会的に価値が高い』と発言してバッシングを受けたことに対するツイートだったが、講義を受けてこれを振り返ると、彼に、研究者への認識の誤りがあることに気づいた。講義の研究者像に基づけば、彼らが研究費を要求するのは、自分の研究が他の研究より優れているからではないはずだ。先行研究の大切さを知り、誰の研究であるかを常に意識し、引用する時も細心の注意を払う研究者が、他者の研究を、「社会的価値」が低い、と軽んじるとは考えにくい。研究費を要求する時に彼らが主張するのは、きっと、自分の研究の「独自性」だろう。

【あべのコメント：はい。あとは研究の社会的意義ですね。】

高校卒業後、自分は何となく大学生として過ごすことを選び、特にこだわりも無くこの大学を選んだ。様々な授業を受けるなかで刺激になるようなことはあるものの、もう3年生になったというのに「将来はこの道を進んで行こう」と思えるものに出会っていない。加えて、大学卒業後にもこのコロナによる影響があるのではないかという焦りもある。自業自得だが、お先真っ暗な状態だ。しかし、「いろいろ入口は紹介するけれども、どの門に入るのか、どのドアに入って、中に入ろうとするのかというのは、学生自身が選ばないとしょうがない」という言葉で少し霧が晴れたような気がする。3年生となると多くの人が自分が決めた部屋の中に入っているか、ここにしようかな、とドアノブに手を掛けている状態だと思う。一方、自分は全てのドアが見渡せる場所に立っているのではないだろうか。一度部屋に入ってしまうと外に出られなくなるかもしれないが、今その場所に立っていれば今後追加される部屋も含め人より多くの選択肢を持つことができる、と考えれば少し気が楽になった。このようなご時世だからこそ、家に引きこもって自分と向き合いながら様々な部屋の前を行き来したい。

…河合隼雄「こころの処方箋」で「文化差の問題や民族としてのアイデンティティに悩んでいる人は、私が日本人として日本の神話について語っているときに、あれは日本のことだ、というふうに聞くのではなく、いかにして自分のルーツを自分を取りまく文化のなかで見出し、かつ、他の文化の人たちとつき合ってゆくことを考える問題として、受け止めてくれているのである。国際的とやらで根無し草のようにふらふらするよりも、自分の根を深く深く追及することによって、他と交わることを考えるべきであろう。」と、日本人としての自覚と国際性について書かれていて、自分の他文化との向き合い方を考えさせられたことを思い出しました。…

【あべのコメント：「根無し草」だなんて簡単にいう人がいますが、そんなの無理なんですよ。みんな自分の文化の影響下にいる。自分の文化に左右されていない人なんていない。複数の文化を経験し、複数の文化をもっている人はもちろんいる。でも、ただそれだけ。けっして根なし草ではない。「深く追求」しなくても、身にしみているものが文化。坂口安吾(さかぐち・あんど)ふうにいえば、文化とは生活そのもの。】

…あるニュースを取り上げたい。それは、米国大統領であるトランプ氏が新型コロナウイルスの発生源が中国にある武漢ウイルス研究所であると指摘、批判している事だ。トランプ氏は新型コロナウイルスの発生源がどこであるかということにスポットライトを当てているが、その裏側で影になっているコロナウイルスを収束させることには何の貢献もしない議論だと感じる。また仮にもこの指摘が科学的に否定されてしまった場合のトランプ氏の立場を考えると、もう少し慎重に発言するべきであると感じた。…

…私は、「きょうだい」という非常に一般的なこの言葉には、なかなか危うい問題が内包されていると感じます。というのも、例えば私自身が男で、したに弟がいるとした場合、私たち2人を「兄弟」と呼べるというのは当たり前ですが、一方で私自身が女で、したに弟がいるとした場合、これも同じように「姉弟(きょうだい)」と呼んでしまうのはいささか不公平な言葉の文化ではないでしょうか。つまり、「姉弟」を「しまい」と読まないのは男尊女卑なのではないかということです。今私が使っているキーボードの予測変換でさえ、「きょうだい」には兄弟、姉弟、兄妹の3種類があるのに、「しまい」には姉妹の1種類しかありません。…

今日の配信の中で、先生が給食でクジラが出てくることにびっくりした人は?と質問すると、はいと答えた人がいて、クジラを食べない人もいたと思いました。私が小学生の時はクジラの竜田揚げは人気メニューでした。…

大学は高校よりも多くの地域から集まっているので、どの地域に住んでいるかによって同じ県内でも違う文化があることに気づきました。例えば、zoomでも言っていたような給食などです。自分の住んでいるところでは給食にクジラが出ることがなかったし、それが出ている地域があるということにとっても驚きました。またそれは、地域の違いだけでなく育った家庭環境にも違いがあるだろうと感じました。私の育ったところは愛知県ですが、母が大阪出身のためたこ焼きやお好み焼きが普通に食卓に出ていました。しかし、友達の家ではそれらは出たことがないと言っていました。このことから地域による差だけでなくそれぞれの家庭の差なんだと感じました。

今日1番驚いたことは、zoomであった1つの質問への答えだ。「鯨を食べたことがあるか」というものだった。私は岐阜県出身だ。海無し県ですら鯨を食べるなら、他県でも食べているのでは無いかと思っていた。だが、食べたことがないの方が多かった。かなり驚いたが、これも食文化の違いなのだろう。ここで1つ思い出したことは、岐阜県高山市で、ハラルフードを取り扱う店が増えてきているということだ。様々な文化が混在する日本の中で、自分とは違う生き方に寄り添い理解しようと歩み寄る姿勢は、文化を知り共生する社会を作る中で尊ばれる行為ではないかと考える。問題としての文化として浮かぶのは、捕鯨についてだ。世界的には批判されているが、文化だとして守りたい人たち達もいる。この問題は、日本と海外の人々との価値観の違いなどが反映される一つの文化の衝突だと私は考えている。…

今回の授業で鯨が給食に出たという人が想像以上にいたので、実際どこの地域で食べられているんだろう、と思い調べてみました。すると、愛知県も含むほとんどの都道府県で給食に鯨が出ていました (<https://middle-edge.jp/articles/10000619>)。自分がこれまでに経験していないから勝手に珍しいと思っていたけど、実際はそこまでマイナーなことでもなかったということに気づきました。おそらく、私の住む愛知県小牧市の隣にある春日井市の給食で出るサボテンの方が珍しかったです。…

自分は食文化について気になりました。各地域によって主食や料理が違い、そこには土地の性質や宗教などが関わっていることに気づきました。中国がいい例だと思います。中国は一つの国の中に地方によって四つの料理に分かれているからです。北部では小麦が取れるので餃子や麺料理、味が濃い山東料理が食べられています。山間部では四川料理と言われる唐辛子を使うことで有名な料理が、長江流域の東部では江蘇料理と言われる豚、羊や魚を主に使う甘い料理があります。南部では、米が主食で、飲茶という習慣がある広東料理が食べられています。ここで疑問に思ったことがあります。中国人は他の地方の料理を食べたりするのでしょうか。日本にも地域によって異なる料理がありますが私たちは割と簡単に材料を揃えて真似ることが出来ます。しかし、中国は日本より遥かに広大な面積です。真似するための食材を揃えることも難しいと思います。だから私は他の地方の料理は旅行で行かなければ食べないぐらい食べる頻度が少ないのではないかと思います。

【あべのコメント：中国の食文化を簡単に分類してしまえば4種類とすることもできるでしょうが、それほど単純ではないのが文化というものです（「The Food Ranger」というカナダ人ユーチューバーのチャンネルがおすすめ）。そして、異文化にはすぐになじめない部分があるのも文化というものです。中国内陸部ではザリガニ（小龙虾＝直訳すると、小さいイセエビ）を食べますが、中国の海辺に住んでいる人には、「そんなの食べない」という人もいるでしょう。】

…私は食文化と聞くとテレビ番組の秘密のケンミンSHOWを思い出す。この番組では全国47都道府県それぞれの特徴を取り上げている。名古屋人の私は毎回あるあると共感しているのだが、先日祖父母の家に行った時に思ったことがある。祖父母の家は岐阜県にあるのだがそこはちょうど愛知県と三重県との県境の地域である。祖父母は言葉は岐阜弁と名古屋弁が混じっており、食事のメニューはなごやめしがよく出る。他にもいろいろなところで岐阜と愛知の文化が混じっているように感じた。そこで疑問に感じたのは、どうして都道府県という枠組みで文化をつくるのだろうかということだ。私の祖父母の家のように県境で文化が入り混じるのならば、これはどこまで続くのだろうか。そう考えると都道府県という枠組みで分ける考え方は正しくないのではないかと私は思う。秘密のケンミンSHOWは都道府県の特徴の違いを取り上げているが、私は地域の文化のつながりについて考えてみたいと思っている。

私は、岐阜県から大学に通っています。岐阜県は愛知県と、とてもよく似た文化を持っていると思っていました。例えば食に関して述べると、味噌を好んで食べたり、冷やし中華にマヨネーズをかけたりするのは、共通している点です。このことは大学に入学後、実際に愛知県出身の友人と話している中で共感を得られたもので、一方で関西出身の友人には共感を得られなかったものであるため、岐阜県や愛知県周辺で根付いている食文化だなと思います。…

…【文化を批判的にとらえ問題を論じること】当たり前ですが俗論と学問的な文化論は大きく異なり、批判も相応の根拠をもってされることでしょう。しかし事実を様々な根拠を基に明らかにすることはできても、感覚的なものを研究によって身に付けることは非常に難しいと思います。文化の研究ではそのあたりの感覚的な部分はどうか扱っているのでしょうか。…

【あべのコメント：とても大事な問いですね。倫理的な問題もあるため、自分が属している社会に見られる文化風潮を批判的に研究することが多いですね。外からの研究としては、その内部でどんな議論や社会運動があるのかに注目する。ある程度は禁欲的に論じるけれども、なにも私見を述べないわけでもない、という感じです。文化人類学などでは一大テーマです。白石壮一郎（しらいし・そういちろう）2011『文化の権利、幸福への権利—人類学から考える』関西学院大学出版会が参考になります。】

Youtubeライブ配信にて先生の「16分でも長いですよ」の発言が特に印象的だった。オンライン授業は内容を理解し自分の中に落とし込み、ノートにまとめる行為を丁寧に行うと、自分の場合は16ぷんの動画ですらほぼ1時間半かかる。多くの教員の授業はまるっと1時間半のオンデマンド授業を行なっており理解、考察を完了するのにまるっと午前中要した日もあった。大学の勉強は抽象的な概念が多く理解に時間を要するためと推測した。なので高校時代の映像授業と大学のオンライン授業全くの別物という認識を学生は持つべきであると警鐘を鳴らすと共に教員側にも今まで以上に内容理解に時間を要することを認識して欲しいと思う。教員の方は授業を「知識の享受」として行なっている「文化」なので教育のプロではないことは十二分に理解している。教え方、方式も模索しているのは分かっている。しかしフィードバックを求める積極的姿勢(アンケートの実施、個別に意見を聞くなど)を持つことも大切と考える。「文化」を脅かされるのはストレスも大きく、大変だろうと思うが共に乗り越えていきたい、ポジティブに捉えていきたい「オンライン授業」であると思った。

【あべのコメント：あと、16分の映像を編集するのも、それなりに時間がかかっているんで…。今後はただしゃべるだけの映像ではないですし。】

…桜の下で入学式を行うというのは明治時代から続く日本の学校文化の一つである。…

【あべのコメント：日本のどこでも4月に桜がさくわけではないです。北海道なら5月。沖縄なら1月から2月。】

…「問題としての文化」として大学文化の一つであるミス・ミスターキャンパスについて自分なりにコメントしようと思う。まずミス・ミスターキャンパスとはどういうものか簡単に説明すると、大学で学生の応募を募り、応募者の中からその大学の“顔”となる男性または女性を審査員が、一般的には容姿を基準にして決めるコンテストのことである。ニュースに取り上げられるなどして問題になっているのは関係者による出場者または出場者から他学生へのセクハラ等の人権侵害だが、自分としては、審査員の主観で人間に優劣を付けること自体がおかしいと思う。容姿を審査基準にするなら容姿に優劣をつけて差別していることになるし、内面も審査するにしても人格を比較することになるので個人の人格を差別することになるからだ。こんな差別だらけのイベントはもうやめるべきだと自分は思う。

私が学校文化と聞いて一番に思いつくのは運動会です。その中でも、組体操は毎年5・6年生が行う花形の種目でした。先生方も指導に力が入るし、保護者も楽しみにしていました。また、私自身も組体操を通してクラスの絆が深まったと感じたし、とても達成感があったことを覚えています。組体操をする事は、高学年として当たり前だと思っていました。しかし、組体操による事故があるということも事実の一つです。障害が残ったり亡くなる生徒もいるとニュースで見ました。組体操は、感動が生まれる一方で事故によって悲しい思いをする活動でもあると思います。その様に考えると組体操を実施することが良いことなのかどうか分からなくなりました。…

…私は、二年前にこの大学に入学し「大学生の文化のウチ」に触れたが、その時やはり「ソト」から見た文化とのギャップを感じた。自らの興味のある分野の研究に励み、意欲が掻き立てられる新しいことに触れるようなキラキラしたイメージをソトから抱いていたが、実際は決められた時間割をこなし、行きたくないアルバイトに行ったり無下な時間を過ごしているように感じた。(私の心持ちのせいだが)しかし、ソトからの勝手なイメージとの差に、勝手に落胆しているだけで、ウチの文化を決め付けるのは違うのではないかと思い、自分の中の文化を再構築できるよう励んでいる。個人の中にある文化はウチでもソトでも何度でも変えられるものであると私は考える。このコロナ禍で、オンライン授業が取り入れられたり、オンラインで大学生のウチの文化に初めて触れることになる新入生は、私以上にギャップに落胆するかもしれないが、私はこの状況における文化を前向きに捉えこれからも大学生生活に励むつもりだ。

―――
…遠隔授業はパソコンに不慣れな私としては大変で、特に音声や画像を送る課題には苦労しました。…

―――
私は、自分が入学前に想像していた大学のイメージと、実際に一年間過ごしてみて感じた大学の在り方が全く違っていたことに気が付いた。その点で、あべ先生が動画教材で仰っていた「文化のウチとソト」にとっても共感した。入学前は、大学に入れば英語をたくさん話して、勉強して、留学生と仲良くなって、遊んで・・・というように普通に過ごせば充実した大学生活が送れると思っていた。つまり、高校の時よりも英語を話すという機会がより多く“与えられるもの”だと思っていたのだ。しかし実際は英語に限らず、そういった自分の理想に近づけるための機会は“自分で掴まなければ”得られない。もっと英語を話したいのであれば、授業以外にもアイコトバなど英語を話す機会を自分から得る努力をしなければいけない。授業だけ受けていても、英語が話せるはずがないということを感じた。そして、特にやりたいことも見つけられずにいた私は、大学の教員がある程度自分の進むべき道を教えてくれる、そんな期待をしていた。しかし実際は、やりたいことは自分で見つけるしかない。そのために様々なことに触れてみるのが大切だということに気が付いた。

―――
…私は新型コロナについてTVニュースで見ているが、なぜYouTubeで見えるのですか。…

【あべのコメント：衛星放送を契約していないので、中国や韓国のニュース、あるいは現地のユーチューバーの動画はテレビでは見られません。韓国のニュースはテグが緊急事態になってからはユーチューブで生放送が見れました。アンテナは日本語メディアに限定しないほうがいいでしょう。】

―――
…遠隔授業について良かったことは、通学時間がなくなり、自分の時間にすることができること、マイクをオフにすれば、外国語の発音の練習が好きなら自分でできるということです。一方、困ることは、自分の姉妹もオンライン授業を受けているので授業が重なってしまった時、回線が不安定になり、自分だけ情報に置いていかれてしまうかもしれないということです。今のところ大丈夫ですが、少し不安です。…

―――
…まず遠隔授業で困ることとして講師と学生の距離が遠く、質問をしたい時などに壁があるように感じました。よかったこととして、講師の人との距離が近く感じられたということがあります。真逆のことを言っているようですがそうでなく、実際距離は離れており不便なのですが、動画教材などを見ると普通の授業では見れない講師の顔がはっきり見え近くに感じられるということです。…

―――
…ライブ配信（今回のyoutubeライブ配信）だと規定の授業時間に勉強を始めることができるので、「よし、勉強しよう」という気持ちになれる。…

【あべのコメント：ライブ形式だとスイッチのオンオフがしやすいですね。それはよくわかる。】

―――
…家のWiFiの繋がりがあまり良くないので、ライブ配信は所々途切れたりしました。なのでライブ配信ではない第1回の動画があって良かったです。

【あべのコメント：ユーチューブのライブ配信は、あとからも見れるようにしてあります。同じURL。】

―――
…問題としての文化として、相撲をあげようと思います。相撲には興味が無いのですが、女性は相撲の土俵に上がることが禁止されているらしいですね。女性はいわゆる「穢れ」の存在として見なされているようです。そのしきたりを令和になった今でも適応しています。臨機応変に変える事ができないものが、「文化」なのでしょう。恐ろしいです。…

―――
文化とは確かに良いもの、尊重すべきものというイメージがある。例えば韓国では食事の際に茶碗を持って食べる習慣は無いというが、これは日本では行儀の悪い行為で食事マナー違反になってしまう。この習慣の有無はどちらが正しいというものではなく、文化の違いとして認め、尊重すべきだと思う。しかし、中には批判的に捉えるべき文化も存在する。例えば学校においては、長年の間「男子の制服はズボン」「女子の制服はスカート」という固定観念があった。これは学校に限らず、社会全体において言える常識のようなものかもしれない。しかし個々人の多様性を尊重する現代では、「スカートを履きたくない女の子」はズボンを履いてもいいとする校則が作られるようになった。伝統的な文化のせいで不利益を被る人がいるということに目を向けることは、常識にとらわれていては難しいことなのかもしれないと思う。だからこそ文化を様々な視点から考えることが必要だと考える。

…私は通学に往復3時間以上かかるのでその時間と交通費が他のことに使えるというのは利点である。コロナによって強制的に授業形式が大きく変わってしまったが、同時に遠隔授業などに関するシステムも大きく進歩するように思う。

…あべ先生はどのように今研究なさっていることについて追求しようと思ったのでしょうか？

【あべのコメント：日本語というのは、どのように書いたらいいんだろうか？と疑問に思ったところからですね。あと図書館で手あたり次第、本を読んでいきました。あと、点字の授業を受けたこともきっかけになった気がします。】

1年生のときの基礎演習の授業で、「他人が書いた文と自分の書いた文を分け、引用してきた部分を明確にしないと盗作になる」と習い、盗作は絶対にしてはいけないものという認識が強まった。しかし盗作してはいけないという規制は、他人の研究と自分の研究は違うものでなければならないという大学の文化に基づいたものだと分かった。…

【あべのコメント：オリジナリティを追求するのが研究の文化なので、そもそも他人の文章を自分のもののように偽装しようとは思わないのです。】

大学に入って見て実際の大学が自分のイメージと最も乖離していた点は、階段教室が少ない点です。今のところ、愛知県立大学の階段教室は入学時に学生が一堂に会した講堂と、S棟の2階の教室の2部屋しか私は知りません。大学の授業は基本的に階段教室で行われるというアニメ、ドラマ、映画等により醸成されたイメージは日本の大学の現実とは異なるということは驚きでした。…

…私は文化=人間の営みで言語は文化の中の1つと考えていました。補論では言語という大枠の中に概念という枠組みがあり文化はその中の1つで、言語が文化を包括していることになると思います。言語と文化はどちらがどちらをどのように規定するのでしょうか。

【あべのコメント：どちらもあつてしょう。相互作用的。】

動画教材の内容から、「文化のウチとソト」について考える。私は、二年前にこの大学に入学し「大学生の文化のウチ」に触れたが、その時やはり「ソト」から見た文化とのギャップを感じた。自らの興味のある分野の研究に励み、意欲が掻き立てられる新しいことに触れるようなキラキラしたイメージをソトから抱いていたが、実際は決められた時間割をこなし、行きたくないアルバイトに行ったり無下な時間を過ごしているように感じた。(私の心持ちのせいだが)しかし、ソトからの勝手なイメージとの差に、勝手に落胆しているだけで、ウチの文化を決め付けるのは違うのではないかと思い、自分の中の文化を再構築できるよう励んでいる。個人の中にある文化はウチでもソトでも何度でも変えられるものであると私は考える。このコロナ禍で、オンライン授業が取り入れられたり、オンラインで大学生のウチの文化に初めて触れることになる新入生は、私以上にギャップに落胆するかもしれないが、私はこの状況における文化を前向きに捉えこれからも大学生生活に励むつもりだ。

文化のウチとソトについて、先生は説明の最後に大学での例を取り上げて自分の興味がある事柄（文化）には中に入って追及していくことが推奨されると仰っていましたが、私はウチとソトの境界線は明確に定めることは難しく、追及すればするほどさらに未知の領域が広がっていき、自分がウチにいるのかソトにいるのかわからなくなっていくのではないかと考えました。しかし研究というものに求められるオリジナリティにはこの未知の領域における自身の意見とその裏付けが必要となり、それが論文や本という形になって他人に評価されることで初めて自身がウチにいることの自覚ができるのではないかと考えました。

本日のyoutubeライブ配信でzoomは100人までしか利用できないということを知ったのですが、私が履修している他の授業は多くても20人程度の規模なのでほとんどがTeamsによるライブ型を採用しています。カメラとマイクを用いることで先生やクラスメートの顔を見ながら教室にいるときと同じようにその場で発言・質問ができるので、遠隔授業にはライブ型が良いと思います。しかし、Wi-Fiの接続の問題で音声や映像が途切れたり、授業中先生が画面上に資料を載せるのに非常に時間がかかるので、やはり不便さや時間のもったいなさも実感しました。ですが、未だに休校が続き授業すら受けられていない小中学校は今後の学習の進め方や進級・進学制度についても問題になるだろうと考えます。次に、問題としての文化に関してですが、以前は小学校において男子生徒にくん付けをするのは普通でした。しかし、現在では男女平等や人権の尊重の問題から人々の見方が変わり、くん付けを使わない文化が生まれたと思います。

今回の内容で、配布資料の中の「自分にとって当然であるからといって、その価値観が普遍的に通用するとは限らない」ということばから、つい最近バイト先で感じたことを思い出しました。私のバイト先には外国人の方が三人いるのですが、彼らはよく舌打ちをします。最初こそは、周りも私も「舌打ちなんかして！」とと思っていましたが、だんだんと彼らの中では舌打ちがそこまで悪いことだともっていないのでは？という疑問が浮かぶようになりました。私の中では、(日本人に共通するかもしれないですが)舌打ち=悪いこと、人に向けてしてはいけないこと、自分がよほど嫌な人にやるもの、と考えており、それが当然だと感じていたため彼らのことが理解できずにいました。よく考えたところで、舌打ちが悪いものでもないとは言えませんが、少なくとも彼らの中では私が考えるよりもっと日常的な、感情表現にも近いのではないかと感じました。

【あべのコメント：たとえば韓国では相手の話をうけて連続して3回舌打ちする文化があります。「それは大変だね」「なんてことだ」という共感をこめています。ちょっと目を細めながらやることが多い。】

…日本では食べないカエルをベトナムで食べた際に、美味しかったがお腹を壊したことを思い出した。

【あべのコメント：ウシガエルは、別名「食用ガエル」ですからね。15年まえ、岡山のカラオケ店でカエルのフライがメニューにあって食べました。そんなに一般的ではないですが、日本でも食われています。台湾でも食べたことがあります。おいしいですね。】

…遠隔授業に関しては、ホワイトボードに書いていくような授業を録画して流すだけのものはすごくやりづらかったです。ただ、資料が参考動画だったりするのは理解がさらにしやすかったです。ライブ配信というのも、資料を補足説明するライブとかだったらやりやすいかなとおもいます。…後略…

【あべのコメント：遠隔授業も、ほんとピンキリですね…。わたしはいい内容にできるよう努力します。】

…私は大学での学び方として学生が自分から学んでいくということに関して反対するつもりはないし、大学生はそうあるべきと理解しているのですが、一つ思うことがあります。大学は学生が一年生、せめて一年前期の間は学生が自分から選び、学んでいく方法を教えるべきだと思います。大半の学生は高校まで勉強を享受しかしてこなかったであろうし、受験勉強についても今は補修や塾で1からすべて教えてくれます。そんな人が大学でいきなり自分から学べと言われてもなにをしたらわからなくなるだろうし、私が一年のときにもそういう人が実際にいました。甘えるなと言われてたそれまでですが、これは大学が教えるべきことだと私は思います。

【あべのコメント：大学教員は、高校までの教育がどんな感じなのかをそもそも知らないです。自分の経験の範囲でしか知らない。なので、高校と大学でどれくらい違いがあるかを知らない。なので、新入生のとまどいにも感知できていない部分がありそうです。】

問題としての文化として、私は「家事は女性がするもの」という文化に問題があると思う。ドラマなどで女性が家事をしていたりすることもあるし、実際に自分の家庭がそうだったということも、そういう考え方の原因になっていると思った。みんながみんなそういう考えを持っているわけではないけれど、この前テレビで「料理しない女は女と思ってない」と発言している人を見てすごく腹が立った。本気で言っているのかバラエティー受けとしていっているのかはわからないけれど、多かれ少なかれそういう考えを持っているんだろうし、女性を何だと思っているんだと思った。…後略…

遠隔授業では、その場ですぐに先生に質問ができない点、友達同士で話し合いができない点、家で紙の消費が多くなってしまおう点、実技の授業ができない点が困るなと思います。良い点は、一人きりなので集中力がより高められることです。

【あべのコメント：知りあいの大学では、配布資料を印刷したものを大学が学生宅に郵送するそうです。イタリアやフランスの外出禁止令では、外出に関する書類を自宅で印刷して記入し所持しないといけないという厳しい規定があったので、プリンターが家がない人が結核に罰金をとられるという状況があったようですね。】

…一番不便なのは図書館が使えないことだと思う。研究の授業では発表のために資料を用意する必要があるが、インターネットでの資料採集に少し不安がある。…

他言語を学ぶ際に壁となる1つは、適切な語が見つからないとき。例えば、日本語で言う「いただきます」や「ごちそうさま」という言葉を英語で言おうと思うとぴったり当てはまる言葉がなく困ることがあります。他にも、日本語を外国人が学ぶ際に敬語が難しいと言われていますが、逆に英語を話そうと思うと目上の人と話す時にため口で話しているような感覚になって違和感を覚えることがあります。そういうのもことばが文化を映しているのだと考えました。

今回の講義では「なにかにスポットライトをあてれば、その裏側には影ができる」という表現（“配布資料-補論2:性格ってなんだろう”より）が非常に興味深く、印象に残った。考えてみれば至極当然のことであるが、過去の自分を振り返ってみても、意識して物事を多面的に捉えようとするのはほとんど無かったように思う。また、この表現と関連してあるニュースを取り上げたい。それは、米国大統領であるトランプ氏が新型コロナウイルスの発生源が中国にある武漢ウイルス研究所であると指摘、批判している事だ。トランプ氏はコロナウイルスの発生源がどこであるかということにスポットライトを当てているが、その裏側で影になっているコロナウイルスを収束させることには何の貢献もしない議論だと感じる。また仮にもこの指摘が科学的に否定されてしまった場合のトランプ氏の立場を考えると、もう少し慎重に発言するべきであると感じた。これからは物事を意識的に様々な角度からスポットライトを当てて捉えるようにしていきたい。

男子の同級生がサイトに「ぼくは男の子でも女の子でもない」と投稿しているのを見ました。彼の中では、自分が男の子という感覚はなく、性自認はどちらかの性別に偏っているわけではない。とのことでした。この投稿を見たとき、彼に対する印象が今までとは変わりました。今までは、普通の男友達の1人として見てきましたが、「特殊な感性を持っている子」という風に認識するようになりました。第1回資料に、他者の文化を語るときに、自分を普遍化した上で他者を特殊な存在のように捉えてしまうことがあると記されていましたが、まさに彼のことについて考えていた私にぴったり当てはまることではないかと思いました。体と同じ性別の自覚を持つ私が普通で、彼が特殊なのだと決め付けていましたが、そもそも体と自覚の中での性別が同じなことが当たり前ではないかもしれないという可能性を考えていなかったのです。この視点は、文化のみならずこの世の考え全てに当てはまるものだと思います。私が今まで当たり前だと思ってきたものの内、私の価値観が普遍的ではなかったものがいったいいくつあるのか考えると、少し怖くなりました。

【あべのコメント：いいコメントですね。「性自認」という用語は認知度が低く、テストにだしたことがあります。】

第1回の配布資料のなかにカテゴリーという言葉がでてきていますが枠組みの分け方は文化によって違います。例えば日本人はマグロ=ツナと考える人が多いようですが、他国ではマグロ、カツオなどはすべてツナとする国もあります。一見文化間の枠組みの差異によって問題は生じそうにないですが、「人間」の枠組みとなると大問題が生じます。過去の歴史に奴隷という枠組みのヒト達がありました。彼らは「人間」の枠組みには入れられず「道具」の枠組みに入れられていました。このことを「今と昔の文化は違うんだからいいじゃん。」とすることは大きな間違いです。なぜなら「人間」の枠組みによる差別は未だに「人種差別」として残っているからです。「人間」とするか「ヒト」とするかは文化によって異なってはならないものです。このように多文化社会にも文化によって異なってはいけないものもあると考えました。

遠隔授業の良い点

- ・通学時間がない
- ・オンデマンド式の授業では、周りを気にせず自分のペースで行える
- ・大変な世の中でも、授業を受けることが出来る
- ・チャット機能を使えば、気軽に発言できる。

遠隔授業の悪い点

- ・対面授業に比べ、集中力に欠ける
- ・授業中に家族の会話が聞こえる
- ・些細な質問を先生や友達にづらい
- ・一人暮らしのためにアパートを借りているが、今は実家にいるため家賃が勿体ない
- ・未だに大学生になったという実感が湧かない

大学での異文化 方言の違いを感じた。今まで尾張地区から離れたことがなかったため三河方言や三重弁などに馴染みがなく驚いた。逆に自分の方言を指摘されることもあり、自分の話す言葉が標準だと思い込んでしまっていることに気付いた。言葉の他にも、冷やし中華にマヨネーズをかけるかなど食文化の違いを感じた。…

問題としての文化について、近年活発な運動であるKutoo運動に対して批判の声が上がったこともその一つではないかと思いました。見た目の統一感やヒールの与える上品なイメージを大切にすべきであるとの反対意見を目にしましたが、それこそが接客業等に従事する女性の健康保持などの権利を侵害した、接客業などの従事者に必要以上に整った容姿を求める文化であるのではないのでしょうか。…ライブ配信では気軽に質問のできるツールがあると嬉しいです。

…手遊びの掛け声が違う…

【あべのコメント：岡山市では「ぐっぱらりーいっしゃーあった」です。こういう、具体例があるといいです。】

…ゲーとパーの分け方のものにも掛け声があります。その掛け声をする時に、私はゲーとパーで分かれ！という掛け声を言いました。ですが他の人たちは、ゲーとパーでそろい！や、グッパグッパーほい！などといった、私とは違う掛け声を言いました。私と同じ掛け声の人もいましたが、ほぼみんな違う言い方をしていました。私にとっては、ゲーとパーで分かれ！という言い方が普通だと思っていましたが、他の人たちにとっても、自分たちの言い方が普通で当たり前だと思っていました。…

…先生の韓国留学経歴に興味があり、留学期間中にどのように時間を過ごしたのか、韓国で日本人に対する固有イメージや偏見を受けたことはあるのか、また留学する時にどうやって困難な時期を乗り越えたのかについて知りたい。

【あべのコメント：食べすぎて、2年間で20キロ太りました。なんで韓国に留学？という質問をあまりにも何度もされたことが、ちょっと面倒だったかも。偏見というのはとくになく、「あべはもう韓国人だ」などとよく言われました。ことばができる、よく食べるだけのことで。留学生ということで学費も半額になり、基本的に快適でした。ただ、大学院で満22才という年齢は、自分一人だけで、他はもう少し年上でした。韓国は年功序列なので、「末っ子」あつかいされたかな。あとお酒文化。わたしはアルコールに弱いので…。】

…思えば、県大に来た理由は自分の学力で行ける範囲で一番高い偏差値の大学がここであったからです。これは自分が何をして生きていきたいのかわからないまま、どこかの企業には取ってもらえるよう行動した結果です。大学とは特定の分野を自分の意思で、より理解する・研究する為に入る場所であるとは思いますが、私の中では"より良い職業に就く為の通過点"という認識が強かったようです。…

…私はデヴィッド・マッケンジー監督の映画、『パーフェクト・センス』を思い出しました。この映画は、ある感染症によって世界の人々は徐々に五感を失って行きます。美味しい食べ物を生み出す食文化は、嗅覚や味覚無しでは失われることが分かります。なぜなら、嗅覚と味覚が無ければ、世界の人々は小麦粉と油があれば生きていけるため、全世界は共通になります。食文化に関する文化摩擦はなくなりそうですが、食文化を見いだすことは難しくなります。しかし、人々は食感を大事にすることで新しい文化を見いだしたと感じました。新型コロナウイルスにも当てはまると思いました。…

…私は外国語学部なので、外国語を学ぶ上で一番重要なコミュニケーションがやはりオンラインでは取りづらく、不安です。…

【あべのコメント：とにかく、あらゆるチャンネルを活用してインプットすることが第一に重要です。映画、ドラマ、音楽、小説、SNSなどでその言語にふれていって、機械相手にでもいいので発声したり（音声認識を活用）、文章を書いたり。わたしは韓国語だけでなく、中国語（北京官話）を話しますが、それは「授業を受けたから話せる」のではないです。トイレの壁に単語帳を貼ってみたり、できるかぎりのことをしました。】

僕は、文化のウチとソトについての話を聞いたときに思い出したことを書きたいなと思います。昔見ていたテレビ番組で、「関西人が関東の味を濃いと言う」ということについて掘り下げていました。("チョコちゃんに叱られる！"という番組でした) 関西人は「私たちは味を繊細に感じることができるので薄味を好むけれど、関東人は濃い味しか食べないからバカ舌なんだな」という皮肉だそうです。でもこれには歴史的背景があるそうで、江戸時代前に未開拓な関東地方を任された徳川家康が工事の人々の能率を上げるためにたくさんの玄米を食べさせようとした。そのために味の濃いおかずが必要だったために、関東のおかずは味が濃くなったそうです。関東人がこれを知っているかはわかりませんが、文化のウチとソトとはこういうことなんじゃないかと思いました。でも実は、関東の濃い口醤油よりも関西の薄口醤油の方が塩分濃度が高いそうです。自分では"そうだ"と思ってることが実は違うということもたくさんあると思うので、探していきたいです。

【あべのコメント：関東と関西では水がちがうからという説明もよくあります。関西は軟水、関東は硬水。同じカップラーメンでも味がちがうというのは有名ですね。ちなみに関ヶ原には関東風の味と関西風の味の両方がメニューにあるうどん屋があります。関ヶ原が味の切れ目だといって。そんなふう文化に境界線を引けるものではないですけどね。】

文化は英語でcultureというのは知っていたのですが、先日cultureには他にも培養するという意味もあるということを知りました。たしかに文化は特定の環境で生まれるので、微生物などを人工的な環境下で育てることの培養と規模や目的などは違って少し通ずるものがあるのかなと思いました。また、大学文化に例えると、培養する中で環境を整える研究者(?)が教授で、それをもとに成長していく微生物が学生たちなのかなとも思いました。cultureが文化の他に全然違う他の意味があったことに最初は納得できませんでしたが、今日の授業を受けて、文化と培養、全く関係のない単語ではないんだと感じました。

【あべのコメント：おもしろいですね。ちなみに、「cultured」には「教養がある」という意味もあります。中国語でも「文化」は教養や「学」と結びつけることがあります（「あの人は文化がない」というときは学校教育を満足に受けていないという意味）。文化という語の位置づけは言語（文化）によってちがう。】

…遠隔授業ですが、英語など会話重視の授業を除いてはとてもやりやすいです。大人数の授業の欠点であった、他の生徒の私語が気になることもありません。ただ、授業ごとに使うシステムが異なり混乱しています。

…問2インターネットを情報収集の手段として良いものであるとする文化。インターネットでは、テレビのニュースや新聞で取り上げられていないことも調べられる。さらに、インターネットは好きな時にいつでも見られるという利点があり、インターネットを用いて情報収集を行うことが多くなってきた。しかしながら、誰でも発信できるインターネットで情報を集めるのは良い方法なのだろうか。…

今年は例年とは異なり、ある授業ではライブでもオンデマンド型でも授業は行わず、ただ講師がユニパに資料を上げていき、それを個々に確認して課題を提出するだけで、講師に対する質問もできないような授業もあり、大学3年目の私も自分が授業について正しく理解できているのか不安を感じますが…

…双方向的なやり取りをした遠隔授業があったので紹介します。パパパコメントというサービスです。先生がTeamsで画面共有して授業しライブ授業をしているところにニコ生のようにコメントできる物のようです。生徒から素早く反応できるので面白いなあと感じました。

…今世界中でコロナウイルスが流行しており、営業中の店に脅迫めいた張り紙をする、いわゆる自粛警察がメディアでも連日取り上げられている。ただ鬱憤を晴らしたいだけであるようにも取れるし、実際私が見たニュースではそのように報道されていた。しかし私は、こうした人々の行動には日本人の同調圧力という文化が根付いているように感じた。今私たちが強いられる自粛というのも、日本人の同調圧力という文化を利用しているように感じる。

…私は百円均一の店でアルバイトをしているのですが、毎日かなりの数の在日外国人(体感的に半数以上がブラジル人で、それ以外にペルー人、ベトナム人など)が来店します。最近私が働いている店舗でもコロナウイルスの流行を受けて個数制限の案内など店内掲示をしているのですが、そのほとんどが日本語で書かれているため来店する在日外国人たちにちゃんと伝わっているのかと疑問に思うことがあります。多くの人は日本語での日常会話は問題ないのですが、読む能力に関しては人によってまちまちのような気がします。なので参考になるサイトに示された「情報が届きにくい方のサポート・不安のケア」の内容、特にやさしい日本語はもっと世間に知れ渡っているべきだと思いました。

【あべのコメント：今回、貼り紙がほんとうに増えましたね。病院にも貼り紙、スーパーにも貼り紙。なにかが書いてある。】

…県外出身の自分にとって大学に入学してからは異文化との出会いの連続で、一番大きかったのは言葉の違いだった。同じ日本語を話しているはずなのに、違う言葉のように聞こえて、入学当初は疎外感みたいなものを感じて苦痛だった。今ではその違いにも慣れて、友達との話の種にもなっている。日本という一つの国の中で日本語という言語が、各地域によって、時には通じないこともあるほど違いをもって話されていることがとても面白いと思った。

【あべのコメント：一つとして同じ日本語はないのです。「日本語」というのは、あくまで観念(カテゴリー)であり、その内実は多様です。だからこそ『複数の日本語』という本があったりします。】

私は「俗論としての文化論に抗して」という内容を読んだときにこれは大きな問題であると思ったのと同時にこれに関連して私自身少し嫌な思いをしたことを思い出しました。それは、私がメキシコに留学に行きたいと周りに話すと、メキシコについてほとんど知らないであろう人たちは口をそろえて「メキシコは危ないからやめた方が良い」と言ってきました。日本ではメキシコについてほとんど触れられることがないに加えて、触れられるときは大抵現地で何か重大な事件が起きた時であり、日本人にとってメキシコは想像し辛い地であることは理解できますが、それでも限られた情報のみでそこは危険だと判断し、あたかもこの考えは正しいんだと言わんばかりに主張されたときは残念な気持ちになりました。…

【あべのコメント：日本人がたくさん住んでいる町だってあるわけですしね。関連：「メキシコの日系企業とその進出先」 <https://amiga-mexico.me/articles/732> この「amiga」は「メキシコに住む日本人のための生活情報メディア」とのこと。】

…文化も内と外でイメージが違うという話がありましたが、視点によって語る内容は変わってくるし、一つの視点では本当に理解することはできないと良く分かりました。しかし、様々な視点から見ても100パーセント客観的に見ることはできないと思うし、実際真実は誰にもわからないのではと思いました。でもだからこそいるんな人が自分はこう思うと示すことが重要なのかなとも思いました。

食文化について、大学の食堂でドイツ人の留学生と一緒にご飯を食べていた時に、ドイツ人の留学生が「日本のご飯は甘いね」と言っていたのを思い出した。よく甘い、甘すぎると口にしていた。…

【あべのコメント：ちなみに、韓国人は日本に来て、「しょっぱい」を連発します。韓国の食事と比較すれば塩分量が多い。そういう人でも「おでん」は喜んで食べる。韓国人も「だし」の味が好き。】

…私は常滑市に住んでいて、今まで三河地方の人と話したことがなかった。なので、三河の人が使っていた語尾が「自分に意見を尋ねている」ものではなく「相槌」だと気づくまでおかしな会話をしていた。そこから同じ県内でもこんなに言葉の文化は違うものかと気づいた。

【あべのコメント：三河の語尾「じゃん・だら・りん」でいう「じゃん」ですかね。】

…不思議なのが、友人によってかわる私の性格である。同じ年、同じような環境である友人ら。Aさんといるときの私とBさんといるときの私が異なるの何故だろう。…ユーチューブを選択した先生素晴らしい。学生が一番馴染みある媒体のチョイス！…

【あべのコメント：AさんとBさんとは、関係がちがうからでしょう。／そうですか？わたしにとっても一番馴染みがある媒体です。ことばのバリアフリーという観点からも、ユーチューブは字幕をつけやすいという利点があります。画質や速度を変えられる点もポイントですね。】

この春休み、隔離期間において私はたくさん映画を見ました。様々な国や時代の映画を見ることで国の雰囲気、時代によって暮らし方や流行などが大きく違うこと、その映画が伝えたい現状を感じ取ることができました。しかし、映画の中でのイメージは単に国や時代のほんの一部でしかありません。私は何も知らなかった状態から映画を通して”外側のイメージ”を知っただけです。しかし、今回の講義を聞いて私は、私は”外側”からしか知らない世界の”中に入りたい”と強く思いました。…

【あべのコメント：映画というのは表象です。描写というか、実態そのものではない。だからステレオタイプにもとづく描写もでてくる。そこで、いろんな人がその映画について語っているコメントを読んでみることで、その映画の見えかたが変わってきます。自分はどう感じたかをしっかり考えてみるのも大事だし、ほかの人がどう見たのかを知ってみることも大事なことです。】

自分の表の顔も裏の顔も全てをさらけ出せたらどれだけ楽なんだろうと思いました。と同時にそもそも自分でも本当の自分がよくわからないから全てをさらけ出すことは可能なことなのかも思いました。

性格を語ろうとしたときに○○さんは□□だよねというのを、集団にしたときに、文化を語るということになるということ？でもそのとき、自分や自分の価値観と比較したり、見方がいつも同じでなかったり、関係性が違ったりして、文化の見え方というのは変化する。確かに、他の文化を語ろうとしたとき、おかしいなと感じるようなことがあるとしたらそれは、自分が見たことがないからそう感じるだけで、自分にとって、という基準を取っ払って、いろいろな文化をとらえていきたいなと思った。

「わたし」も「相手」も動的な存在、という講義内での言葉はすごく身に沁みました。私は日頃から相手によって自分の性格が自然と変わること、違和感を感じていました。本当の自分の性格は？と自問自答することもありましたが、これからはそうすることもなくなりそうです。性格が相互作用で変わるとすると、あたりまえのことかもしれませんが、一緒にいて楽しいのも、一緒にいて嫌な気分になるのも、全部自分のせいでもあり、相手のせいでもあるような気がしてきました。嫌な気分になる相手との向き合い方を考え直そう、と改めて思いました。自分にも非があることを忘れずにいたいです。

…私の性格についてある友達は「おとなしくてしっかり者」と言い、またある友達は「活発でおちょこちょい」と言う。正反対の意見だが、これもその友達と自分の関係だったりスポットライトの当て方の違いなんだろうと思う。だからこそ「性格が個人に内在していて、客観的分析によりその人の性格を語ることができる」という発想を否定している『「モード性格」論』の言っていることにとっても共感した。しかし一方で、その逆の“客観的に性格を分析したもの”を重視する例もあることを知った。その1つが就職試験で導入されている「性格適性検査」だ。2016年リクルートキャリア調べの検査導入状況のアンケートによると約半数の中小企業が「面接だけでは応募者を見極めることが難しい」からという理由で導入したそうだ。またフランスのレイ・コルマンが創設した相貌心理学、顔による性格診断というものも使われつつあると知った。その検査結果を採用の1つの基準にすることは『「モード性格」論』共感者の私としては納得がいかない。でも多くの企業が導入していることも事実なので、今後検査の長所短所や実態を調べていきたいと思った。

言葉に社会の認識が反映している、ということにとっても共感しました。私は漫画や映画が好きでよく見るのですが最近はずまらないなと思うことが多くなってきていました。でも、ある映画を見て久しぶりに感動しました。その時に私は、なぜ自分が感動していてどういう感情を抱いたのかを説明できませんでした。でも涙が止まりませんでした。そんな自分にとっても驚きました。なぜなら私は、自分の中にどういう感情があるか決まっていると生きていたからです。しかし実際は感情という概念があって、そこに名前をつけただけだということに気がきました。私達は普段、感情に名前をつけることで理解しコントロールしているのだと思います。それに気づいてからは、まだ自分の知らない感情があるということがわかりそれを感じられる作品を見つけるという楽しみ方を見つけました。よく考えれば当たり前のことなのですが、今回のことのように定義付けされていることが前提な物事を、新鮮な目で見直すことが何か新しい発見につながるのかなと思いました。
